

## ◆「中学校英語教諭研修会」報告書

研修名	中学校英語教諭研修会「英語スピーキング評価基準表の学習会」
日時	2019年4月24日(水) 18時30分から20時00分
場所	北部生涯学習センター
講師	崎浜功美教諭(今帰仁中学校教諭)、渡慶次正則(名桜大学教授)
参加者	7名

### 1. 研修の内容

テーマ 「英語スピーキング評価基準表について」

#### (1) 研究発表 「英語スピーキング評価基準表の作成と評価」40分 (崎浜功美教諭)

崎浜教諭が名桜大学大学院修士課程で英語スピーキングにおける評価基準表の作成と試行について研究し、その活用について中学校英語科教諭に紹介した。

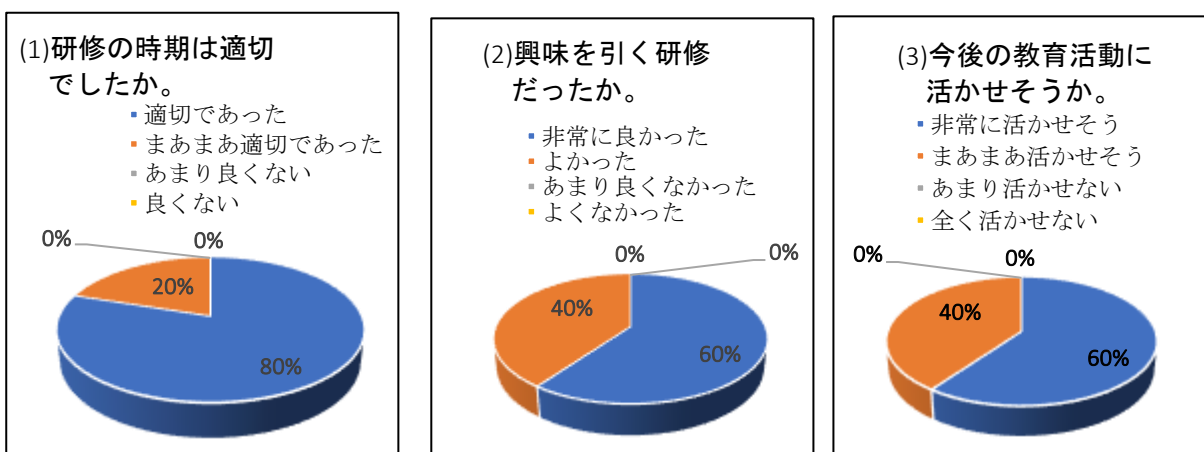
タスクを基に「話す」内容を、○言語機能(トピック)、○発音、矯正・イントネーション、○正確さ、○語彙、文型・複雑さ、○流暢さ(態度)等に分類し、それぞれのレベルに応じた評価基準を設けた。数年前からの試行錯誤の結果、評価の客観性など評価者による差があり、また評価に時間がかかる、という反省もあった。今後継続して研究していく必要があるとの報告であった。

#### (2) 補足・指導助言 30分(渡慶次正則名桜大教授)

研究発表の講話を踏まえ、スピーキングについての必要性や評価基準表の課題や発展性等について指導助言した。「スピーキング」の研究についてはまだまだ始まったばかりであり、今後の取組の継続と学習指導要領の内容に照らし合わせて研究を進めてもらいたい。

また、CEFRとACTFLという言語運用能力基準についても解説し、いかに多くの内容を会話に盛り込めるか、会話の流暢さ、英語の総合力としての「スピーキング」が大切になってくるとの助言であった。

### 2. 事後評価アンケートの結果 (参加7名、提出5名 提出率71%)



### 3. 研修者の感想から

(1) 今回の研修会の感想・意見をお聞かせください。

○スピーキングテストの評価はどうしても主観が入ってしまったり、基準が不ぞろいであったりする現状があり、非常に悩みどころであった。そこにフォーカスして頂けたことはとても有意義なことであると感じた。時間をか

けて作成して頂いた基準表を自身の授業で活用したいと思う。

○CEFR や ACTFL など、世界共通のスタンダードを良い点と課題点を挙げながら実情に合わせて検証されているので今回提示された評価基準は信頼性があると感じています。これからもよりよく改善されて行ってほしいです。

○「英語をペラペラ話せるようになりたい」という生徒がほとんどです。スピーキングの指導・評価にしっかり取り組んでいこうと思いました。「慣れが自信になる」という渡慶次教授の言葉を授業の中で実践できるようにしていきたいです。

○スピーキングテストも全国学力調査などで組み込まれてきたので日々の授業でどうやったらよいか? どう評価したらよいか困っていたので今日の研修は為になった。パフォーマンステスト頑張ろうと思いました。

○評価のあいまいさと難しさを感じていたので参加してよかったです。

(2) 今回の研修で勉強になったところはどこですか。

○スピーキングは目に見えず、またレコーダーなどで記録しない限り残すことができない点に評価のしにくさがある。学校に戻ったら同僚に話し、今回の研究の成果である基準表を互いに理解したい。そして、スピーキングテストのタスクについても検討し、生徒の力を少しでも正確に測る工夫をしたい。

○評価基準をそろえることの難しさや評価者による判定のずれを修正することと運用の仕方の調整をすることの難しさを常に意識しながら評価に当たらなければならないことを考えさせられました。

○ACTFL や CEFR をしっかり読んで勉強したいと思います。タスクの設定など勉強していきたい。

○スピーキングテストの評価基準があれば現場の先生方も助かると思う。音読がスラスラできる人は早くしゃべれるようになる。

(3) 今後の北部教育研修センターへの感想・意見・要望等

○研修時間ははっきり決めておくべきだと思います。

○英語科の指導法などの研修を増やしてほしい。

### 3. 研修企画者の感想

○今年度から全国学力学習状況調査に英語が新たに加わり、試行錯誤の中「スピーキング」も導入された。学校現場の先生方にとって今回のスピーキング評価における評価基準表の研修会はタイムリーな機会だと思う。講師の崎浜教諭は、現場で在職しながら名桜大学大学院で本研究を行い、その成果の発表と学校現場への資料提供を行い、評価者にとって複雑で曖昧なスピーキング評価の先導的役割を担ってくれた。なお、全国学力学習状況調査が終わり、本研修会開催日が、県への報告と年度初めの慌ただしい時期と重なり、研修参加者が少なかったのは残念である。

○現職教員の大学院での学びや研究活動を先生方へ伝え、絶えず学び続けることの大切さを周知することができた。時期を考慮すればもう少し参加者が増えた可能性があり、他の英語科教員の研修でも紹介したい内容である。



(文責 新城 敦)

